

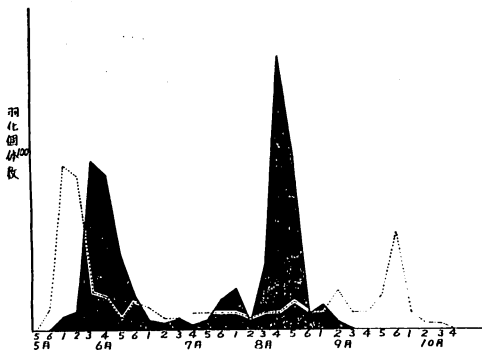
ミカンナガタマムシの生態と防除

大 串 龍 一
(長崎県総合農林センター)

1960年から1962年にかけて、長崎県のみかん主産地である伊木力、長与一帯はミカンナガタマムシ *Agrilus auriventris* S. SAUNDERS の大発生により大きな損害を受けた。この虫の幼虫はみかん樹幹に入り形成層を喰害し、成虫はみかん葉を喰つてともに大害をあたえる。多数の幼虫が喰入した木は枯死する。この虫は本邦西南部の柑橘園における重要害虫であるにもかかわらず、いまだにその生態は不明の点が多いので、今回の大発生の機会にこの生態を調査した。その結果従来の田中(1928)三池ほか(1961)等の知見とくらべてことなつた点、あるいはその後明らかになつた点について報告する。

1. 発生時期の問題 この虫は1年1世代であるがその成虫の発生は5月より11月までの長期にわたり、そのうちでも6月と9月に多いといわれていた。しかし、長崎県における1962年の調査では、6月と8月発生のピークがみられた。これを熊本県における1960年の発生とくらべてみると第1図のようになり、第1のピークはおそく、第2のピークは早くなつている。このちがいの原因は今の所不明であるが、この発生のピークがどの時期に生じるかを確かめる事は、この虫の防除適期をきめる上に重要である。

第1図 ミカンナガタマムシの羽化消長



2. 成虫の産卵前期の長さ この成虫が羽化してから産卵するまでの日数は、これまでは産卵の観察がむずかしいため不明であつた。そこで、この雌成虫の羽化後11日目までの各令の個体について卵巢の發育状態を解剖調査した。その結果、この成虫にみかん若葉を与えて飼育すると、羽化後7日頃から成熟卵ができはじめ、8~9日頃から産卵が開始されることがわかつた。

3. 薬剤防除試験 この防除法としては、現在エンドリンの樹幹塗布による成虫の羽化脱出阻止法が行われている。しかしこれはすでに喰入した幼虫の被害を防ぐことができないので、樹幹内の幼虫を殺す方法を検討した。各種薬剤の樹幹塗布試験の結果を第2図に示す。これによると、ガンマーライト、ガットサイド等の天牛防除用塗布剤は樹幹内の幼虫を殺すことは少ないが脱出阻止効果は大きく、一方、アグリサイド、ネオパークサイド等はかなり幼虫殺虫効果があることが推定された。この試験は伐採樹を対象とした室内試験なので、野外の立木については更に検討を要するものとする。

第2図 各種薬剤の塗布処理による成虫の脱出阻止試験
黒い部分：羽化脱出成虫数
白い部分：羽化して脱出途中に死んだ成虫数全体の数が少ないものは、幼虫のうちに死んだ個体が多いと考えられる。

